Rio

豊田市矢作川研究所　月報

◆あけましておめでとうございます
◆逢妻男川とホタル
◆自然を愛でる
　― 豊田市自然愛護協会の活動の中で ―
◆矢作川が奏でる観光地
　― 平戸橋勘八峡を辿る　その２ ―
◆平成 23 年度豊田市矢作川研究所シンポジウム

12・1
2011 2012
No.159

豊田市矢作川研究所　〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860　FAX 0565-34-6028　e-mail yahagi@yahagigawa.jp　URL http://yahagigawa.jp

あけましておめでとうございます

柴田　一美

新年あけましておめでとうございます。今年も皆様のためにスタッフ一同頑張りたいと思いますのでよろしくお願いします。

巨大地震やそれに伴う巨大津波、台風による集中豪雨、そして例年になく異常とも思える暑い７月上旬と、その後の梅雨に戻ったような天候など、昨年ほど自然の猛威、異常気象を感じた年はありません。しかし、そうした時でも生き物たちは一度減少はしますが、比較的速やかに回復していきます。つまり、原始の昔から幾度か劇的な環境変化の洗礼を受けても適応と進化を果たして生き続けてきたのです。それは自然の持つ計り知れない力であるのかもしれません。

さて、少し話は変わりますが、みなさんは水際建築の舟小屋、または舟屋をご存知でしょうか。自分がはじめて目にしたのは４，５年前です。伊根の舟屋と天橋立の西側の溝尻の舟屋であり、両方とも生活と海が密着した空間です。一昨年、三方湖の舟小屋へスケッチに行ってきました。ここは、伊根とは違って舟のみ格納する建物です。屋根は分厚い茅葺、柱は丸太の掘立柱で壁は無く縄文時代にタイムスリップしたかのような錯覚にとられるのは、あまりにも素朴なたたずまいのせいでしょう。白川郷の合掌造りの屋根裏に見られる垂木を補強する筋違いと同じものがありました。伊根では、漁で使うさまざまな漁具が収納されていて、雑然とした印象でありますが、ここは実にシンプルで「シンプル・イズ・ザ・ベスト」というフレーズがぴったりです。

舟小屋は、それぞれの地方の生活によって存在や役割は違いますが形状は似通っています。それは、自然条件を考慮して建てられており建築物として実に興味深いところです。その自然条件に対応するために様々な工夫がされています。将棋の駒のように柱の上部を少し内側に傾けたり、湾曲した柱材をあえて使ってそのような形にしたり、湿気を逃すための通気性に対し、外壁を張らないなど。特に外海に面して立地している舟小屋では海の厳しさと併せてでしょうか、小屋の構造がきわめて頑丈にできています。

こうしてみると、極めてささやかな水辺の建物ですが、その存在が地域の生業や暮らし、また自然との色濃い結びつきの証となっていたり、風土の違いが舟小屋に固有の型を与え、それが地域性を帯びた漁村集落の景観を築き上げているところが魅力だと思います。また、人々が海に直に接するため、その海の自然に対して謙虚に向き合い生活をしている姿勢が強く感じられるのです。それらは我々現代人が今忘れかけていることであります。

今年も勿論自然派で頑張りたいと思います。

（しばた　かずみ、豊田市矢作川研究所所長）

逢妻男川（おがわ）とホタル

今村　美治

昨年も３月に地域内の水田の排水溝へ放流したホタルの幼虫が５月に成虫になり飛んでくれました。早速会員同士連絡を取り合い、わずか数匹のホタルのあかりを眺める時のうれしさ…。また、夜遅く出向いた時、草木の陰にとまっていたホタルが１匹、２匹と我々を出迎えてくれたかのように周りを飛びまわってくれる時の感動は、何物にも代えがたい喜びであり、平均年齢60代半ばの会員８名が、10代の少年に戻れる瞬間でもあります。

会員の大半はコミュニティ会議の環境委員会に属していますが、この会では10年前から若林の中央を流れる逢妻男川の水質調査を続けています。さらに活動の一環として７年前から始めた魚の生態調査ではアユ、ボラ、ハゼなど20種類以上の魚が確認出来るなど、全体としては下水道の整備に並行して、少しずつ男川が浄化されつつあるのが実感できていました。しかし一部の生活排水溝の汚れが今なおひどい事も判っています。これを浄化する術を持たない私達は、事あるごとに地域の皆さんに男川の魚を水槽で展示し「この魚の為に」と男川の浄化を訴え続けてきました。そして次の術は「ホタルの為にも」と４年前に「若林ホタル研究会」を立ち上げ準備を始めた次第です。

先輩である「松平ホタル同好会」の親身な指導を受けて、初年度から産卵、幼虫の孵化、放流を経て約30匹の成虫が飛んでくれ、全会員大喜び。このときの感動は今も語り草になっています。その後の成果は、一昨年10匹、昨年は18匹とまだ飛翔数は少ないけれど、放流場所を新たに小学校周辺や会員の自宅などにも増やしながら少しずつ実力を養っています。今年は数にこだわり、100匹以上のホタルの飛翔を目標に活動を進めていますが、まだまだ未熟な会の事、結果はその時になってみないと判らないといった不安な状態です。

子供達を交えた生物調査

この活動をしていく上で先輩達から教えられたことのひとつに「ホタルよりカワニナの飼育、カワニナより水の管理」と課題を伺っていましたが、餌となるカワニナの飼育はホタルの何倍も難しく、特にカワニナの稚貝を育てる事には連戦、連敗に近い失敗を繰り返しています。これを克服してこそ実力がつくと、励ましあいながら頑張っていますが、一昨年、昨年と親貝を水カビ病で全滅させるなどの苦戦続きです。

付近の水路での調査風景

若林には里山はもちろん林すらほとんどなく、男川だけが自然の象徴といった地域のためか夏期には気温が高くなりがちで、水槽の水温の管理でかなり苦労しています。幸い同じような条件を克服して結果を出しておられる日進市のグループに教えを請い、適切な助言を沢山いただいていますが、その地域に合った飼育方法を如何に早く見つけ出すかが大きな課題のようです。

魚の生態調査を通じて少なくとも２名の少年が魚や、男川に関心を持ち活動の手助けをしてくれており、彼らの参加が我々の大きな励みになっていますが、ホタルの飼育でもこの様な少年少女達のファンが現れてくれるか否かが活動の大きな成否となると考えています。

ゲンジボタル

（いまむら　みはる、若林ホタル研究会）

自然を愛でる　― 豊田市自然愛護協会の活動の中で ―

光岡　金光

豊田市自然愛護協会は、豊田市内の貴重な動植物、地質等の保存及び愛護を図り、併せて自然愛護思想の普及に努めることを目的として、昭和 49（1974）年に設立されました。①動植物、地質の調査及び保護に関すること、 ②貴重な植物、自生地、動物棲息地、地質等の保全に関すること、③名勝の景観保持に関するもの、歴史的、学術的に貴重なものの保全に関すること、④自然愛護思想の普及に関することを主な事業とし、このことに理解と熱意を持つ 8 つの団体 (豊田市名木愛護会、豊田植物友の会、豊田野鳥友の会、豊田昆虫友の会、豊田地質友の会、豊田市淡水魚類研究会、矢作川天然アユ調査会、豊田哺乳類研究会) の構成員全員 (約 500 人) が会員となっています。各団体は、その名称のごとくの分野で活動を進めていますが、その集合体としての自然愛護協会は、各団体から推薦された理事による理事会で活動の方向を決め、名木めぐりや矢並湿地一般公開などの自然保護啓発事業、市内に点在する貴重な湿地の保全・保護作業や継続的な巡視活動、動植物保護に向けた提言などを行っています。

湿地の保全作業

矢並湿地の一般公開時の解説

投網による魚類の採捕

私自身は、豊田市淡水魚類研究会に 20 年くらい所属していることになりましょうか。

つい 1 年ほど前、矢作川の川口町地域で「アユカケ」を捕まえました。これまで、様々な関係で豊田市内の河川・池沼の淡水魚調査にかかわってきましたがアユカケの実物を手にしたのは初めてでした。ずんぐりむっくりしたこいつを見た瞬間は、名前が出てきませんでした。これに似て、川底を這っている淡水魚に (大別しても)、ドンコ、ヨシノボリ、カマツカ、ツチフキ、カジカ、ハゼ、チチブ、ゴリなどがいます。アユカケも図鑑や写真などでお眼にかかってはいても、初めて実物と対面すると種の同定に自信がなくなります。図や写真の投影角度の違いもありますが、なにしろ環境や年齢による個体差があります。このアユカケも捕らえた直後は、まわりの砂礫の色に似て薄茶色でしたが、写真を撮ろうと網に入れて黒っぽい石の近くに持ってきたら、シャッターを切る頃には、もう体全体がかなり黒っぽくなっていました。いずれにしても、初めて手にしたアユカケにびっくりというか感動しました。とにかく、図鑑だけでは味わえない感覚です。はじめて実物を見たときは、いつも同じような感覚を味わったことを思い出します。そこに、実物に触れることの意味があるように思います。

平成 14 年から愛護協会の理事を務めています。それまでは水の中ばかりを見てきましたが、理事になって、植物や鳥、昆虫や地質の方々と知り合ってはじめて外を見始めたようなものでした。あまり関心のなかった魚以外の動植物の名前を少しずつ知ることで、なんとなくそれらに親しみをもつようにもなりました。池のほとりでホザキノミミカキグサを見つけ、アヒルの顔のような小さな花を見た時も、まさにアユカケを初めて見た時と同じうれしさを感じました。

私たちは自然の中で生かされています。より良く使わせてもらうしかありません。少なくとも、人の過ちで自然を壊し、人の生活に負の影響を招くような活動は慎まねばならないと思っています。

自然を守っていくことは壮大なロマンであり、歴史を作ることと同じだと思っています。自然愛護協会や各団体のやっていることは、ほんの一過程に過ぎませんし、重箱の隅をつつくようなことなのかもしれません。それだけに、活動の位置づけをしっかりして価値づけをするとともに、活動するもの自身がその価値を認識する必要があると思っています。とは言うものの一握りの人たちの活動では、限りもあるし、継続させることも難しくなります。

私たちは、多くの人にアユカケやホザキノミミカキグサに気づいてほしいし、道端のごみ一つを拾うことも大切な一過程であるという意識をもってもらえることを願って活動を続けています。

（みつおか　かねみつ、豊田市自然愛護協会会長）

付記

- 豊田市名木愛護会　約 200 名
  市指定名木の保護、名木めぐり、名木指定、老朽木の保護研究
- 豊田植物友の会　約 110 名
  月例観察会、県外研修、各種観察会講師派遣
- 豊田野鳥友の会　約 60 名
  月例・遠出・一泊の探鳥会、各種探鳥会講師派遣
- 豊田昆虫友の会　約 30 名
  昆虫の生息・分布・生態調査、各種観察会講師派遣
- 豊田地質友の会　約 10 名
  県内各地の地質調査・地質観察会
- 豊田市淡水魚類研究会　約 20 名
  ウシモツゴ生息地保護巡回、市内各河川の魚相調査
- 矢作川天然アユ調査会　約 30 名
  アユ関連の生態調査、外来魚の駆除調査
- 豊田哺乳類研究会　約 20 名
  稀少哺乳類の調査、特定外来生物の生息調査

矢作川が奏でる観光地

― 平戸橋勘八峡を辿る　その２ ―

倉地　格

■勘八峡誕生の軌跡

観光地、平戸橋勘八峡は三つの立地条件が錯綜して成り立っている。まずは往古よりの大動脈、矢作川である。この河なくして勘八峡なしといっても決して過言ではないと考える。人々は川沿いに集落を形成し、水辺に生活と心の潤いを求めてきた。勘八峡の発展は更に上流にも波及効果をもたらした。広梅橋付近一帯は「三河ライン」と呼ばれ遊覧船が浮かび、これより富国橋までの約２㎞はハイキングコースとなって、戦時中でも新緑や清流に触れる観光客でにぎわったとか。深い渓谷のなかを連綿と続く奇岩や急流なす自然美の景観は、まさに山紫水明の地として多くの人々を魅了した。

二つ目の動脈は、矢作川と双璧をなす尾張・三河と信州を結ぶ中山道の脇道として栄えた歴史の道、飯田街道である。明治 23（1890）年より、県の飯田街道路線変更工事に伴い、同 28（1895）年、木造の平戸橋が現在の地に架橋された。この橋の上流からは勘八峡の絶景が一望でき、下流眼下には数々の伝説を秘める波岩の大岩盤が広がっている。写真撮影会、学童写生大会、ＮＨＫのど自慢全国優勝者大会、短歌俳句会、青空囲碁大会、勘八音頭発表会など、数々のドラマが繰り広げられた（図 1）。この橋は明治 28 年の橋脚・大正２（1913）年の鋼材トラス・昭和 11（1936）年の橋床鉄筋コンクリートから成る橋で、県下最古の現役の橋といわれる所以と思う。時代は移ろうとも、歴史遺産として大切に守らねばならない橋であろう。

図１　昭和 20 年代後半に勘八峡で開催された桜祭のポスター

残る一つは、矢作川、飯田街道と共に相次いで誕生した交通機関である。通称「尾三（びさん）バス」と呼ばれた尾張と三河を結ぶ乗合バス、愛知県下では最初であり、国内でも箱根の富士ホテルに次いで２番目の営業である（図 2）。大正２（1913）年８月、平戸橋～名古屋東田町間の営業許可を受け、翌大正３（1914）年９月には、本社を平戸橋に置き、「尾三自動車株式会社」を設立、珍しさと便利さが評判となり親しまれた。

一方、鉄道も日本に初めて開通してから約半世紀が経過した大正13（1924）年10月、三河鉄道により待望の平戸橋駅が開駅した。大正15（1926）年の電化記念の絵葉書には、平戸橋の鵜飼が掲載され一役かっている。ホームに立てば満開の桜が目に染み、百数十メートルの駅前通りの桜並木や雪洞（ぼんぼり）の灯が迎えてくれる。平戸橋西詰めよりの遊歩道には露店が点在し、枝下用水沿いの散策路は行き交う人々が肩触れ合いながらの桜見物。洞ヶ峯山頂より望む矢作川の雄大さ、何れも古き佳き時代のスケッチの一齣（ひとこま）である。

図2　尾三バスのりば（前田悠紀吉氏所蔵）

■迷路に入った勘八峡

昭和20（1945）年、無条件降伏という名の終戦や、たび重なった地震の痛手から人々は懸命に立ち上がろうと頑張って生きていた。昭和22（1947）年に県は再建日本の健全娯楽の一環として、名勝地勘八峡などに再びスポットを当て、直面している施設の破壊、自然風景の荒廃などを憂慮し、観光地保全整備案に着手し善後策を練った。地元有力者も呼応して、同年7月に「ヤハギ川観光協会」を設立、初代理事長に本多静雄氏、常任理事加藤唐九郎氏他8名など背水の陣で始動した。

昭和25（1950）年の桜花爛漫のとき、地上の天国とまでいわれたテネシー河の名をかり「日本テネシー平戸橋勘八峡」と命名。翌年4月には、勘八峡一円の景勝は待望の加茂県立公園に指定された。平戸橋の下では「勘八音頭」の発表会を盛大に開催し、里謡ざんざ節と共に話題を提供した。更に一帯の景勝地に観光施設の充実をはかるべく「平戸橋観光協会」を設立し、野外演舞場やバンガローの建設、吊橋の架橋、桜の植樹、遊歩道づくり、県内水面増殖指導所の誘致などの整備拡充に努力を惜しまなかった。しかし、猿投町当局は観光事業に極めて消極的で、東海有数の観光地にも拘わらず、夜桜の照明施設さえ渋る始末であった。

昭和35（1960）年4月、時の協会役員は遂に三役揃って、町の助役を訪れ、平戸橋観光協会の解散決議文を手交して引き上げ、幕を閉じた。爾来20数年に亙り平戸橋勘八峡はかつての輝きは消え、伊勢湾台風の復旧工事すらままならず、訪れた観光客は呆れて逃げ出し、人が寄りつかない暗闇の迷路にと向かってしまった。

■復活への序曲

平戸橋より北の丘陵に、勘八峡のテーマパークともいえる洞ヶ峯前田公園がある（図3）。公園の中央には101段の石段による参道が設けられ、登り詰めた頂上には高さ約12 mの洞ヶ峯聖観世音菩薩がそびえ建ち、激動の昭和、平成の時代を静かに見守って来た。公園内には、全山にわたり建築物、各種記念碑や施設が建ち並んでいたが、惜しむべきは、戦時下の国策による金属の供出で、仏像、モニュメント、記念碑の銘板にいたるまですべての金属が武器、弾薬と化したことである。往時の姿は今日では古い写真でしか見られないが、磨きぬかれた石造りの台座や建造物の技術などは、貴重な歴史、文化遺産として興味深いものといえる。

図3　前田公園

この公園は明治7（1874）年越戸村上井畑（現平戸橋町上井畑）の出身で、わが国、土木建設請負業の雄「前田栄次郎」翁が昭和9（1934）年に自ら計画、施工、完成させたことから、洞ヶ峯前田公園と名付けられた。翁は青年期、大志を抱いて上京し、明治、大正、昭和の3時代を国内外で活躍し、国策遂行の一翼を担って請負業界の権威者に昇り詰め巨万の富を手にした。「わが富は我が富にあらず、社会より預かりたる富なり、これを効あるべく社会に還元することは現時の我が使命なり」の信念遂行の一つの事業である。

長い迷路に入り休眠中の平戸橋勘八峡は、乱伐された洞ヶ峯、放置された伊勢湾台風の傷跡、目を覆いたくなるゴミ、人影もなく誰いうとなく「あぶない場所」との風評がついてしまった。この惨状を憂い、立ち向かったのが、“見直そう・育てよう勘八峡”の思いを

胸に、25 年前に豊田市市議選出馬の天野弘治氏である。地域住民も、この熱い思いに応えるべく目を覚まし、長い地道な努力の幕開けとなった。官の指導を受け、地元愛護会の設立など活動の輪は年々広がり、まさに官民一体となった復旧活動は今日も続けられている。

知る人ぞ知る、往時の勘八峡の復活を願う夢は、昨年 12 月に前田栄次郎翁没後 50 年の記念誌『善處一歩』（前田栄次郎研究会編・発行、2010 年）の発刊を契機に静かに広がりを見せはじめた。本年（2011）12 月、翁の没後 51 年を目度に、見直そう・育てよう勘八峡を旗印に、「勘八峡山水会」の設立準備を進めている。昭和初期の景勝地勘八峡は「山紫水明」の地といわれ、この二文字をとり、山水会と命名するに及んだ。まちづくりの核として、今再び勘八峡にスポットを当て、地域住民のパワーの結束と炸裂を期する会として育つことを祈念する。

（くらち　いたる、アド清流愛護会 会長）

お詫びと訂正

Rio2011.11（No.158）の 2 ページ右段 14 行目に間違いがありました。
「爾来猿投村は挙母村一体と…」となっていましたが、正しくは、「挙村一体」です。
ここにお詫びし、訂正いたします。（白金）

▶平成 23 年度 豊田市矢作川研究所シンポジウム

テーマ：川の力を取り戻す　～アユから眺めた矢作川のいま～
日　時：平成 24 年 2 月 11 日（土）　13：30 ～ 16：30
場　所：ＪＡあいち豊田本店ふれあいホール

矢作川流域の河川環境には様々な課題がありますが近年、中流域においてオオカナダモの大繁茂や川底の石の小型化など、これまでにない現象がみられるようになり、新たな問題が起きている可能性があります。

本シンポジウムでは、川の形や河川流量、砂の量の変化などに着目し、アユをはじめとする川の生物の視点から矢作川の問題を考えるシンポジウムを開催します。また、ポスター展示によりさまざまなアユの研究事例を紹介します。

みなさまのご参加をお待ちしています。

昨年のシンポジウム基調講演

◆講演

（仮）アユの生息する河川の物理構造	浅枝 隆（埼玉大学大学院）
アユから眺めた矢作川の河川環境	山本敏哉（豊田市矢作川研究所）
底生動物から見た矢作川の河床環境	内田臣一（愛知工業大学）

◆パネルディスカッション
パネラー：浅枝 隆、高橋勇夫（アユ研究家）、内田臣一ほか
コーディネーター：山本敏哉

＊申し込み不要、参加費は無料です（シンポジウム後のレセプションは要申込 3,000 円）。

後記

私たちの住んでいる場所を良くするための地域に根ざした活動には、立ち枯れ木等の整備や自然環境の保全はもとより、歴史の掘り下げ、各種調査、遊びのアイテムとしての活用など、様々な形態があると思います。今回はそうした地域に根ざした活動の一旦を紹介しました。今後も機会を設けて適宜紹介していきたいと思います。地域で活動をされておられる皆様のご意見をお待ちしております。（間）

R100 再生紙を使用しています